

民芸思想の受容と実践

— 外村吉之介を中心に —

宮 川 智 美

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）

2013年3月発行 抜刷

民芸思想の受容と実践

—外村吉之介を中心に—

宮 川 智 美*

Reception and Practice of the Mingei Theory:

Focusing on Tonomura Kichinosuke

MIYAGAWA Tomomi

Abstract

“Mingei” is a word that was first coined by Yanagi Muneyoshi (1889-1961) and his associates in the 1920's. Since then the Mingei movement developed two objectives: one is to promote the idea that hand craft objects are seen as beautiful artworks in and of themselves and deemphasizing the concept of authorship; the other is to realize Yanagi's theory in practice.

This report focuses on the reception and practice of Yanagi's theory by Tonomura Kichinosuke (1898-1993), who participated in the movement from the early period up to the 1960s, when Mingei began to gain popularity. Tonomura played a seminal role in refining the theories behind Mingei and promoting Mingei as a folk crafts movement, as Yanagi conceived it.

Tonomura's involvement to the Mingei movement as follows: First, his struggle with individualism led him to accept the principles of the Mingei movement. Then, he utilized the medium of weaving in order to practice Yanagi's theory. Finally, he helped develop and refine the movement as an educator known for his criticisms against the “Mingei Boom” of the 1960s.

Tonomura was fundamental in the promotion and realization of the Mingei movement; his main achievement is his work in defining and defending Yanagi's Mingei theory. That said, his attitude restricts the flexibility of Mingei theory and the development of new interpretations.

Key words: The Mingei movement, Yanagi Muneyoshi, Tonomura Kichinosuke, Reception, Practice

はじめに

民芸とは民衆的工芸の略として、柳宗悦（1889～1961）を中心に造られた言葉であり、1926年に柳、河井寛次郎、濱田庄司、富本憲吉の連名で発表された「日本民芸美術館設立趣意書」は民芸運動の始まりとされる。その後民芸運動は、多くの人々を巻き込みながら、ものの収集・保存・生産に取り組んだ工芸運動として、また近代化のなかで生活の在り方を模索した思想運動として展開していく。

民芸を理論的に体系付けたのは柳宗悦であり、今日民芸論は柳の思想として論じられることが多い。しかし、民芸が着目された当初は、柳に限らず同時代的に「民芸的」なるものに関心が集まっていた時期であり、民芸運

キーワード：民芸運動、柳宗悦、外村吉之介、受容、実践

*平成24年度生 比較社会文化学専攻

動においても同人らの柔軟な解釈の集合が運動を形成していたと考えられる。つまり民芸運動には、「民芸」への関わり方の質的な違いにより二つの方向性があるといえるのではないか。一つは、後に民芸と呼ばれることとなる美的価値観を共有し、その意義や理論化また自身の制作への昇華を模索した立場である。もう一つは、民芸をすでに確立された一つの理論・思想と捉え、それに基づき理念実現のための実践を行った立場である。これらは必ずしも年代的な差異ではないが、本論文では便宜的に前者を第一世代、後者を第二世代と呼ぶ。両者は明確な区分が難しく、個々の事例を具体的に検討する必要があるが、ここで第二世代という観点を提示するのは、民芸運動研究における関係者の位置づけを明確にし、方向性の差異を捉えるために有効だと考えるからである。民芸運動において第二世代の実践は、運動を広め維持するために不可欠であったが、一方で「民芸」を理論的枠組みとして固定化する動きでもあったと考えられる。

近年では民芸運動に関わった個人作家を、民芸運動から独立した存在として論じる研究が進みつつある。これはいわば彼らを第一世代として位置づけ、彼らが民芸の（柳の）理論的枠組みの中でのみ活動を行ったわけではないことを示している。一方で、民芸運動の実践に関わった人物を第二世代という観点から位置づけることは明確には行われてこなかった。民芸の理論に現代的な問題を解決し得る可能性を見出す今日の動向において¹、第二世代から引き継がれた民芸運動の固定化された思想を、その形成過程を踏まえた上で解体していく作業が求められている。こうした作業は、第一世代が模索した「民芸」が、多くの問題意識の回答と成り得た潜在的な可能性を紐解くこととなるだろう。

本論文で取り上げる外村吉之介（1898～1993）は、典型的な第二世代の一人だと考えられる。外村は、初期から「民芸ブーム」に至るまで、生涯民芸運動に関わった。彼は、時期により静岡・岡山・熊本を中心に全国一特に西日本で活動を行い、民芸運動の実践において中心的な役割を果たした。外村についての先行研究は、民芸運動とキリスト教の関係を論じた、神田健次の一連の研究が代表的である²。また、民芸運動の活動を記録し、その総意を代弁する人物として外村に着目するのが、竹中均や戦暁梅による論稿である³。その他、彼は倉敷での民芸運動の一端を担った人物、また倉敷の町並み保存に関わった人物として特定の地域との関わりの中で取り上げられてきた⁴。本論文で、民芸思想の普及に自覚的に取り組んだ人物として外村が果たした役割を検討することは、「第二世代」を対象とする今後の研究において相対的指標となると考えられる。

本論は、大体外村の生涯に沿って展開する。まず外村がどのような背景のもと、民芸思想として柳の理論を受容したのかを跡づける。その後、彼がその理論を基に行った制作を通しての実践、さらに民芸運動の指導者としての実践を取り上げて立場の変化とその特徴を考えたい。こうした受容と実践を跡づけながら、民芸運動研究における「第二世代」という観点を提示し、その役割と影響を明らかにする。

1. 民芸思想の受容

外村吉之介の生涯をたどりながら、まずは彼が、柳の理論を民芸思想として受容するまでの背景を跡づける。彼は、同時代の動向に漏れず個人主義に傾倒しつつも、自己の能力不足に苦悩し、その打開のために柳の理論を受容したと考えられる。

外村は、1898年滋賀県の麻布商に生まれた。1913年頃から大阪の貿易商で働き始め、またこの頃従姉の勧めによりキリスト教会に通うようになった。1921年23歳の時に洗礼を受け、その後1923年春から1926年3月まで関西学院大学において神学を学んだ⁵。

この時期について後年外村は、「私の神学校（関西学院）時代をご存じの諸君は私が如何に個人主義的な生活をしてきたか〔……〕をよくよく知ってをられる」⁶と述べ、「晩学であった私は、近世の思想のめざめもおそく、大正のころによく個性の発見に喜び勇み、マックス・スチルネルの『自我経』に興奮して、自我が人生の一切の中心だと信じて動いていた」⁷と回想するように、個人主義への傾倒が認められる。ここでの「個人主義」とは、マックス・シュティルナー（Max Stirner）を具体例としていることから「個の発展、発現は道徳の唯一のまたは一つの目的」⁸とする考え方だと言えるだろう。

しかし、理念的に個人主義—完全な人格者—を志向することはできても、能力が伴うとは限らない。この時期を回想する文脈において、彼は次のように述べている。

人間の一個人の欲は本来無際限であり、それは本来^{コスモス}調和ではなくして^{〔ママ〕}ケオスである。ここにおいてか一部の個人主義者はその歩みを止めることなく混沌そのものをさえも肯定的にみつづ進んでいく。そしてそこに現れる体度は人間性の単なる自然主義であり、デカダンであり、遂には虚無主義である。空虚、分裂、独善、出鱈目の姿である。／哲人はさげんで「個性を發揮せよ」という耳ざわりのよい事をいうけれども人が真面目に個我にたより、個人を生かさんとする時、それは「分かつべからざる全人」ではなくて「自ら分るる」自我の弱さをしか見出しえない（手稿）。

彼はこのように、個人主義に対する憧れと限界という葛藤を抱きつつ、関西学院大学を卒業し、その後三年間は京都でYMCAの主事をしながら同志社大学にて哲学を学んだ。

民芸思想の受容の背景には、こうした個人主義に傾倒しつつもそれを実現し得ない自己の能力に対する葛藤があったことが窺える。この頃影響を受けた思想について彼は、特にカール・バルトの『ロマ書講解』⁹と柳宗悦の「工藝の道」について「前者は雷のように強く私を撃ったが、後者は慈雨のように私を包んだ。それらはともに、近世の浪漫主義に対する激しい批判であり、甘い自己陶醉を打破る警鐘であった。私は回心した」と述べ、その影響の強さを強調している¹⁰。ここでは、特に柳宗悦からの影響に着目したい。

柳宗悦の「工藝の道」は1927年4月『大調和』に掲載された。柳は「個性美も一つの美であることに誤りはない。だがそれは最後に満足すべき美であろうか。個人主義が不満足になる時、かかる美への見方は永続するであろうか」と疑問を投げかけ、美術が「人間中心 Homo-centric」であるのに対し、工芸は一ちょうど宗教が「神中心 Theo-centric」であるように「自然中心 Natura-centric」の所産であるとする。そして、工芸美を理解するためには個性中心の近代の美学は適さないという考えを表明する¹¹。工芸については、無名の「民衆」によって多数作られた、生活に仕える「下手物」に「健康な美」が現れると考えて、工芸における没我にこそ「解放せられた個人を感じる」と述べている¹²。

「工藝の道」について、外村は「それが真の美への開眼であり、神への帰依の道であった」として、この文章との出会いをきっかけに柳に師事するようになる。1928年9月に初めて柳の自宅を訪ねた際には「工藝の道」から受けた影響について、「去年はあれで、全く惨めな自分の足場を凶星さされて、ほんとうに降参しました。〔……〕私にとってだけでなく、近世の思想や信仰にとって非常に啓蒙的な論文だと思います」¹³と打ち明けている。

こうしてみると、外村にとっての民芸論は、彼が当時抱えていた問題意識に対する回答であったことが浮き彫りになる。つまり、柳の理論を受容したことで、彼を苦しめていた個人主義からの脱却という、彼にとって大きな価値観の転換がなされるのである。

2. 制作を通しての実践

柳の理論を民芸思想として受容した外村は、その思想に沿った生き方を実践しようと模索を始める。ここでは彼が当初取り組んだ、染織の制作を通しての実践を見ていきたい。彼は生涯制作に携わったが、展覧会に作品を出品するなど、いわゆる作家としての活動を行ったのは、概ね倉敷に移住するまでだと考えられる。まずはこの時期までの彼の活動について、制作にあたる初期の意識、静岡への移転と制作の開始、そして倉敷への移住とそこでの活動について時間軸に沿って取り上げ、彼の活動が制作そのものよりも、精神的な態度の表れであったことを示したい。

工芸品の制作を行うことに関心を持ち始めた外村は、制作を志向した初期の意識について次のように述べている。

私は自分のこれからの生涯の仕事に就て語った。一段高いところから他人に話しかけたり、教えたり、論議したり、自己を発表する生活は最早許されないものと思われぬ。少許の学問や自覚を捨てて、何ものに全く帰服する生活に進むべきことを深く求めないではいられない。今はだまされても心から安堵し、信頼し、自らの名も美も思わない工人の中に入り得たら。私はこんな風に先生〔柳〕に述べた¹⁴。

この時外村はすでに30歳を迎えていたが、それまで制作を行ったこと、または学んだことはなかったと考えられる。そうした状況の中で、彼は「工人」となることを望むのである。彼は、制作を行うこと自体を希望するというよりも、柳が著作のなかで描き出した「工人」像に憧れたと考えられる。これは同じ会話のなかで外村が、一燈園を一つのいい型だとする認識を示すことからあながち誤りではないだろう。

柳は「工人」について、「無学」であり自分が制作に携わることに自覚的でないにもかかわらず、その「伝統」と繰り返しにより「美」が生まれると考えている¹⁵。柳のいう「民衆」は、「本来は実在しない理念的概念」¹⁶ともいえるが、外村は理念としてこうした生き方を肯定し、その実現の方法として制作を行うことを志向したのである。こうしてみると、柳の周辺にいる作家が柳と出会った時にはすでに制作技術や経験を持っていたのに対し、外村は柳の理論に共鳴することで制作を志すようになる、稀な例だということができる。ただし当初柳は、陶工になることを希望する外村を「遁世的な」「聖者風の生活」を望んでいるだけではないのかとたしなめ、思いとどまらせている¹⁷。

こうして外村は、精神的安らぎの実現のため「工人」に憧れ、実践に関心を持ち始めた。しかし、1929年4月に日本基督教団の牧師として山口教会に着任、私生活では同年10月に竹本清子¹⁸と結婚するなど、民芸運動の同人らとの関わりを保ちつつも¹⁹すぐに制作を開始したわけではない。

■制作の開始—静岡

外村が制作を開始するのは、浜松市西ヶ崎の日本メソヂスト笠井講義所へ転任した1932年4月である。浜松市には、すでに柳の思想に共鳴する人物らが集まって民芸運動の実践に取り組んでおり、外村の移転もその活動に参加するため柳の仲介により実現した。

浜松での民芸運動で中心的な存在であったのは、静岡に柳を紹介した中村精、医師の内田六郎、浜松を代表する大地主である高林兵衛、植物染料と手織物の研究を始めた平松実である²⁰。この4人を中心に浜松の民芸運動は、同時期に柳が取り組んだ大札記念国産振興東京博覧会の展示館「民芸館」の建設や、高林家の敷地内に建設された展示空間である日本民芸美術館など、初期の民芸運動における重要な事象とも密接に関係した。

浜松移転後の外村は、最初は小野口村小松（現浜松市浜北区）に住み、2か月ほど平松実の工房に通って染織の基礎を学んだ²¹。7月には浜名郡積志村西ヶ崎に移り、教会と、土蔵を改装した仕事場で、柳の甥である柳悦孝と共に制作を行った。彼は、秋には展覧会に出品し始め、翌年春に国展で受賞しており、順調に織物の技術を身につけていったと考えられる。

その後高林が民芸運動に消極的になったため²²、外村は1934年3月末に袋井の講義所に転任した。外村にとって、民芸運動への参加と信仰という精神的行いが互いに補完し合うものであったことは、袋井時代の資料からも読み取れる。彼は教会の週報で、信者らに積極的に民芸運動や制作について報告し、理解を求めるとともに、共に制作を行うことを呼びかけている。8月1、2日には「蒐集中の古民芸品展」、14、15日には教会堂において「外村牧師仕事場 新作織物展観」を開催し、1937年3月からは教会で民芸品の販売を始めている²³。次の引用からは、周囲の人々が牧師の活動に徐々に理解を示す様子と、彼の制作と信仰との密接な関係を窺うことができる。

仕事場の仕事についてもほとんど凡ての方がその真意を了解して下さる様になった事も感謝です。先日釘宮監督も来訪下されてから他所での話に「外村の織物の仕事は伝道と二つにして一つだ」と仰せられし由、伝聞安心しました。／「工芸」の真義をさとれば、信も美も不二の世界です。〔……〕仕事場につかれた体には、聖言が強く働きかけて、礼拝に対する熱心がしきりに起ります²⁴。

このように外村にとって制作は、民芸思想の実践のための一つの方法であったことがわかる。こうした袋井での実践は、戦争の激化と東南海地震による被害という苦難のなか、福井県大野へ疎開した1945年3月まで続いた。

■組織的な民芸運動—岡山

戦後の1946年3月末日、外村は岡山県倉敷市に移住し、生涯の活動拠点とした。ここで外村は、協会・民芸館・

販売組織が関わる組織的な民芸運動に参加し、次第に実践方法の変更を行うこととなる。ここからは、倉敷での活動の特徴を簡単にみていきたい。

外村が倉敷に移住した直接の理由は、戦時中倉紡万寿工場で働いていた、第四次沖縄県勤労女子挺身隊の女性たちに織物の指導を行い、沖縄帰国後の生計に役立てるという計画の指導者として柳に推薦されたからである²⁵。ただし、倉敷紡績社長の大原總一郎からは「沖縄の娘のことは一つの動機なので、戦後この地方の文化運動をやってほしい」²⁶と言われたことを、外村は後年振り返っている。

岡山の民芸運動は、岡山県民芸協会、倉敷民芸館、岡山県民芸振興株式会社一協会・民芸館・販売組織一という3つの組織と、協会員が関係し合い推進したといえる。岡山県民芸協会は1946年6月に発会し、日本民芸館を中心として、柳宗悦の提唱する民芸運動の理念に従って岡山県下で次の事業を行うことを目的に定めている²⁷。すなわち、「イ、工芸品の調査、蒐集、展覧、指導／ロ、出版、民家の写真撮影／ハ、集会、講演、映画／ニ、地方民芸館の創設／ホ、工芸伝習所、図案指導所等の開設／ヘ、工芸品の売店経営」である。これらの事業は順次実行され、(ニ)が倉敷民芸館として、(ヘ)のうち代表的なものが岡山県民芸振興株式会社として実現された。倉敷民芸館は、初の地方民芸館として1948年11月15日に開館式を行った。外村は、倉敷民芸館の建設時から実務を担い、開館にあたって協会長の總一郎の指名により、館長に就任した。一方、岡山県民芸振興株式会社は、1947年に行われた県下の民芸品調査の結果「民芸振興に寄与すべき経済団体の必要が認められ、外村の熱心と、大原の指導と斡旋により」杉岡泰が中心となって同年設立された²⁸。

岡山県の民芸運動を担うこれらの組織は、それぞれ協会が「調査・指導」、民芸館が「蒐集・展覧」、販売店が「製作・販売」という役割分担をしながら民芸運動を支えていった。後に外村はこの三者の関係を「民芸館を目を開く道場とし、協会を精神を普及する体とし、流通者は世に物を広げるエネルギーであるという三位一体」と説明している²⁹。こうした組織的な実践の中で、彼は自らの制作ではなく、指導者としての働きに重心を移していく。

ここまで、外村が倉敷に移住し、そこで行った実践を取り上げてきた。重要なのは、制作を志向した初期の意識に読み取れるように、彼の制作活動があくまでも柳の提示した民芸思想に沿った生き方を実践するための一つの方法だったと考えられる点であり、こうした民芸思想の解釈は、後の彼の活動の展開にも影響を与えていると考えられる。

3. 指導者としての実践

外村の実践は次第に、制作を離れ、自らが解釈した柳の理論の普及に取り組む、指導者としての立場へと移行していく。ここでは、外村が取り組んだ熊本への活動の展開及び制作指導や後継者育成の活動を取り上げる。彼がどのような自覚と意図のもとこれらの活動を行ったのか、またそれが現代に至るまでの民芸運動に与えた影響について考えたい。

■「民芸ブーム」への対抗—熊本

まず熊本への活動の展開について、これまでの静岡や岡山の活動との違いに着目しつつ、その活動の意図を考えてみたい。熊本での活動は、これまでの型式を展開した一つの実践として、倉敷での活動の延長と考えられ、改めて論じられることは少ない。しかし、これまでの活動との差異に着目することで「民芸ブーム」という時代背景の変化に対抗し、自らの理想とする民芸運動の実現に取り組む外村の試みとして位置づけることができる。

外村が熊本で活動を始めたのは、「民芸ブーム」を問題視するようになった時期である。この頃の倉敷民芸館の様子は、「物を見るところで物を見ぬといった場面が起こるほどの来館者をつかれながら迎え送るのは問題です」³⁰と伝えられ、ブームの影響とそれを問題視する様子が窺える。この時期の民芸ブームは、「高度経済成長を背景とした農村部へのノスタルジアの高まりを受けた地方文化消費の動きの一つ」だと考えられ、民芸運動と直接的な関係を失った民芸は、「観光地の土産物や都市部での趣味的な消費対象」となった³¹。

新たな民芸館の設立が具体化したのは、外村の身边に十分な民芸品が集まり、同時に適当な建物（倉敷の土蔵）を入手したためである。外村は各地を検討する中で、1963年秋には場所を熊本市竜田町（現熊本市北区龍田）三宮公園の隣接地に決定、1965年5月熊本国際民芸館を開館した。熊本での活動は、民芸館の開館に先立って協会

が設立され、販売組織として既存の上村正美の店舗を取り込むなど、活動形態は岡山での活動を踏襲している。一方で、これまでの外村の活動拠点と比較するといくつか異なる点がある。それは地元の素封家という有力者の不在³²と、民芸館という拠点の立地とに顕著に表れているだろう。ここでは特に民芸館の立地について取り上げて、熊本での活動の位置づけを考えたい。

熊本国際民芸館は前述のとおり外村の希望により三宮公園の隣接地に設立された。ここは、観光地のある市街地からバスで20分ほど離れており、当時市会議員の阿部次郎は「万一経営が行き詰まったら」という懸念を示し、熊本城周辺を探すよう提案した。これに対し外村は、「便利さとか経済性より文化の視点を優先」したといい³³、開館後も、観光で訪れる団体客を軽視し、少数でも民芸運動を理解する人が訪れることに価値を認めている³⁴。

こうした選択は、日本民芸館の建設を構想した当初の柳の考えと、相反するようにみえる。当初柳は、民芸館の建設場所について訊ねた外村に、「非常に立派な民家を持っている人が、私どもの運動を理解して提供してくれることになりました。[……]一つの典型的な民家です。それを移すとすると、東京の方が理解する人が多いのでしてね」と回答している³⁵。ここで柳は、高林から提供される静岡の民家を、移築してまで東京という都市に民芸館を建設するのが良いと考えている。これは、「物がもともともっていたオリジナルな文脈をいったんはずして、異なる文脈の中に再構成」することで「都市生活の中での新しい用途を提示」という民芸運動の展示方法が持つ特徴³⁶を、展示空間となる民家においても適用し、「典型的な民家」を都市という異なる文脈に置くことで新しい価値を提示しようとしたといえる。一方熊本国際民芸館の場合、確かに都市というアクセスの良さや、利用者として想定される人物については、柳の選択とは対照的である。しかし、「理解する人」を求めて文脈を再構成するという観点では、共通している。外村は、「幸か不幸かほとんど世に知られていなかった」ために「今日の民芸ブームにもほとんど荒らされることなく存続している」³⁷熊本の地を、この時期に民芸館を設立するのに適した土地だと考えたのである。彼にとって熊本国際民芸館の設立は、東京のような都市生活への民芸という思想と商品の移入ではなく、「民芸ブーム」の及んでいない「純粋な地方」へ、倉敷の土蔵の移築³⁸という文脈の再構成を伴って行われた、民芸精神の移入だったのである。

つまり熊本での民芸運動は、指導者としての外村が社会背景の変化に伴い、理想とする民芸運動を実現しようという試みだったと位置づけることができるだろう。

■思想の普及と後進の育成

外村は、協会や民芸館を運営するのみならず、制作者・使用者・民芸運動を担う後進に対し、それぞれ指導を行っている。ここでは代表的な試みを取り上げて、彼の行った民芸思想の指導における特徴と、彼の自覚について考えてみたい。

まず、染織の技術指導として代表的なのが「倉敷本染手織研究所」の試みである。研究所は倉敷民芸館の付属施設として外村の自宅に設けられ、毎年数名の女性の研究生が住み込みで修行に励む場である。そこでは、「朝から晩まで、正しい民芸品の生まれる心で起臥をともし、実のある人間になろうと志して」³⁹おり、技術だけではなく、「正しい」工芸を制作するための精神の養成も課程に含み、生活を通してこれを身につけるといえる考えが窺える。研究生は、天性からくる独自性は肯定されつつも、あくまでも「日用品を作る工人」として「美学の理論や、デザインの自信や、個我の主張」などを排除するよう求められる。ここには外村の、生活態度としての民芸思想の解釈と、当初外村が抱いた「工人」像の実現を目指す理念が窺える。

使用者を対象とした試みとしては、外村が講師を務めた「民芸女性教室」を取り上げたい。これは、女性を対象に、講義と見学、時には実習が盛り込まれた継続的なプログラムであり、「生活の中に真実や美しさを実現するのが民芸の心」だということを「物を通して明らかにし、社会や家庭を明るく美しく」することを趣旨としている⁴⁰。この活動から派生して、受講生が自主的に民芸研究会を発足するなど広がりをもせた⁴¹。研究会の中心人物の長谷川勢津子は「何とか家庭の中へ用の美を持ち込みたい」という問題意識を持ち、活動は次第に「暮しの中に使いやすく美しい道具を持ち込む運動へと広がっていった」ようだ⁴²。具体的な方法として「良い品」の共同購入や、各自持ちよりの皿を使った会食などで、実際に「民芸」を使用する段階を盛り込んでいることが特徴であろう。外村の考えは「暮しの中にあるべき『美』を、母にも教えたい子にも訓したいの思いから、家庭を預かりその環境を整えることのできる主婦に、先ずは識って戴くのが賢明」⁴³だということにある。彼は女性

を媒介として家庭での実際の生活変革を図り、講義と「良い品」の提示という方法からは、民芸思想を形式化して普及する指導法的一端が窺える。

さらに民芸運動を担う後継者の育成という観点から、彼が日本民芸協会として取り組んだのは、日本民芸青年夏期学校（現日本民芸夏期学校）である。これは「柳師の直弟子たちは永からぬ余生の内に、思想や運動の後継者を養う責任を果たさねばならぬ」という問題意識のもと、青年層を対象とした教育普及の企画である⁴⁴。1973年当初は、外村と関係の深い倉敷・熊本・伊予・出雲の四地域の主催で行われた。内容は、3日間の工程のうち水尾比呂志と外村の講義が大半を占め、他に映画の上映、民芸館や工房の見学、質疑応答の時間が設けられた。「原点である民芸美論は必ずなければならない」という外村の考えを反映した講義中心のカリキュラムだといえる。この試みは、翌年から日本民芸協会主催として実施されたが、当初は積極的には取り込まれなかったようである。その理由としては、柳を慕っていた一部の人物が「受け売りで説明はしないでほしい」という柳の言葉を聞いており、また民芸を理論的に語り得るのは柳のみだと考えて、外村が力を入れた「民芸学」の樹立を目指す講義形式の試みに対し躊躇していたことが考えられる⁴⁵。

こうした人物とは異なり、外村は民芸を、啓蒙すべき確固とした理論と捉えていた。実践にあたり、外村が自覚していた自らの役割について考えてみたい。富山における民芸運動の中心人物である安川慶一について外村は、「日本の民芸館運動は柳、河井、浜田、芹沢、棟方諸氏のものようにおもわれがちだが、彼らは知名度の高い作家的に貴重な存在であった。しかし身を挺して前線には立たなかった。立って奔走したのは青森の相馬貞三、富山の安川慶一、鳥取の吉田璋也、福岡の野間吉夫の諸士であった。安川氏はその中の秀れた使徒であった」と述べている⁴⁶。引用中には挙げられていないが、「身を挺して前線に立」った一人には外村自身をも含んでいると考えられる。また、岡山県民芸協会新年親睦会での外村の挨拶には、次のようなものがある。

会長〔外村〕は最後に「美の王国の実現に向って、喜びと確信を持って活動している」と語られ、聖パウロの「コリントへの手紙」から「我は植え、アポロは水を注げり。されど育て給うは神なり」の章句を引かれ、「僭越だが仮に私をパウロに、杉岡氏をアポロに例えるとして、植えたり、水を注ぐことは出来ても、神つまり柳師の光がなければ出来なかった。」と結ばれた⁴⁷。

ここでは外村は自らを、最初期キリスト教における最大の伝道者とされるパウロに例えている。彼は自身のことを、民芸思想を伝える使徒、つまり民芸思想を広く伝えるという使命のために遣わされた人物として自覚し活動していたといえる。同時に、伝道すべき民芸思想は、「神＝柳」の思想として確固とした不可侵のものと認識されるのである。

おわりに

ここまで外村吉之介の生涯を概観しながら、彼の活動を、民芸思想の受容、理念実現のための制作という実践、民芸思想の普及を図る指導者としての実践という三点から跡づけてきた。これを踏まえて、外村を民芸運動史における「第二世代」として位置づけつつ、彼の活動を振り返り、民芸運動における役割をまとめたい。

本論文では、外村吉之介を取り上げるにあたり、便宜的に第二世代という言葉を用いて、民芸運動研究における関係者の立場を明確にすることを意図した。外村は、個人主義への傾倒と行き詰まりを背景に、柳の理論を民芸思想として受容した。彼はまず、染織の制作を行うことで民芸思想に沿った生き方を実現しようとした。岡山へ移住後は、組織的な民芸運動に関わることで、次第に民芸思想の普及を図る指導者へと立場を変えていく。熊本での活動は、これまでの実践を踏襲しつつ民芸ブームへの対抗として「純粋な地方」に民芸精神を育成しようとする試みだと考えられる。また彼の普及活動は、民芸の制作者・使用者・運動を担う後継者の育成へと及び、そこには民芸思想の普及に取り組む強い自覚が認められる一方、固定化・理想化された民芸論の語りが行われたことが窺える。

第二世代としての外村の活動の意義は、次の点に見出せる。つまり、組織的な実践型式のもと、もしくはより限定した対象に対して、指導者として自覚を持って民芸思想を説くことにより、活動を実現させ、柳の民芸論を

文字通り解釈した「正しい民芸」を保存した点である。これは、理念の継承を実現した功績と捉えることができる。しかし一方で、「正しさ」は一種の「条件」となり、第一世代に見られる民芸論の柔軟性や、時代に応じた新たな解釈を阻む活動であったことも指摘できよう。

本論文では外村吉之介を取り上げて、民芸運動を論じる際に、運動の実践者を「第二世代」として位置づける観点を提示し、彼らの受容と実践を通して、柳の理論を民芸思想のいわば唯一の原典として保存してきたことを明らかにした。ただし、第二世代と位置づけられる他の実践者については、未だ十分な実証的研究がなされておらず、また第一世代とされる人物についても柳の理論との差異を明確に区別して論じられているとは言い難い。これらを今後の課題とし、論文の結びとしたい。

【謝辞】 本論文執筆にあたり、外村民彦氏はじめご協力下さった皆様に御礼申し上げます。

注

- 1 熊倉功夫、吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』思文閣出版、2005年等。
- 2 神田健次「機織の伝道者：外村吉之介論」、『神学研究』48号、関西学院大学神学部、2000年3月、45-74頁等。
- 3 竹中均『柳宗悦・民藝・社会理論：カルチュラル・スタディーズの試み』明石書店、1999年。また戦暁梅「“Away”の内実：『満州民藝調査報告展覧会』とその周辺」、『FLC言語文化論集：polyphonia』1号、東京工業大学FLC言語文化研究会、2009年3月、81-87頁。
- 4 柳沢秀行「日本民藝運動の主導者たちと倉敷」、『大原美術館紀要』第3号、2009年12月、5-52頁。また西部均「倉敷の町並保存に見られる基礎理念と主体の構成：倉敷都市美協会と民芸運動」、『一九九九年人文地理学会大会研究発表要旨』150-151頁。
- 5 生立ちについては以下を参照。大月一清編「外村吉之介年譜」、『民藝』486号、1993年6月、24-26頁、朝日新聞大阪本社『母ありき』エイト出版社、1978年、24-27頁、塚本邦雄「外村吉之介・清子夫妻を偲んで」、『民藝』508号、1995年4月、28-30頁。
- 6 外村吉之介『『美について』：一つの懺悔録』（手稿）、1931年頃、個人蔵。以下特に註記のない場合は同手稿より引用。
- 7 外村吉之介『民芸遍歴』朝日新聞社、1969年、299頁。
- 8 下中邦彦編『哲学事典』平凡社、1982年、493-494頁。
- 9 カール・バルト（Karl Barth）は、20世紀を代表するスイスのプロテスタント神学者で、1919年出版の『ロマ書』は、いわゆる「弁証法神学」の出発点とされる（バルト神学受容史研究会編『日本におけるカール・バルト：敗戦までの受容史の諸断面』新教出版、2009年、エーバハルト・ブッシュ『バルト神学入門』佐藤司郎訳、新教出版、2009年）。
- 10 外村、前掲『民芸遍歴』299頁、及び式場隆三郎「西ヶ崎の教会工房」、『工藝』38号、1934年2月、2-3頁。
- 11 柳宗悦『工藝の道』講談社、2005年、23-24頁。
- 12 同上書、194-195頁。
- 13 外村吉之介「民藝の父を訪ねた頃」、『民藝』3〔5〕巻4号、1943年4月、49-50頁。
- 14 外村吉之介「民藝の父を訪ねた頃」、『民藝』5巻5号、1943年5月、29頁。
- 15 柳、前掲書、46-47頁。
- 16 中見真理『柳宗悦：時代と思想』東京大学出版会、2003年、143頁。
- 17 外村、前掲「民藝の父を訪ねた頃」、『民藝』5巻5号、32頁。
- 18 清子は山口県出身で、同志社女子専門学校英文科を1929年に卒業した。柳宗悦の教え子でもあり、講義に啓発されてウィリアム・ブレイクに関する講演会に出席していた（竹中正夫『倉敷の文化とキリスト教』日本基督教団出版会、1979年、526頁）。
- 19 山口での教会報『高き櫓』からは、山口教会時代の民芸運動関係者との交流が窺える。例えば、柳宗悦の文章や、柳兼子の音楽会の告知が掲載されるほか、朝鮮で浅川伯教・巧兄弟に会ったことが記述される（『高き櫓』17号、日本メソジスト山口教会、1931年4月）。
- 20 中村精「民芸と浜松」、『開発：中村精遺稿集』中村篤〔ほか〕、1974年、21-22頁。
- 21 『平松実：浜松の民芸運動』浜松市美術館、1989年、3頁。
- 22 柳宗悦「書簡777」、『柳宗悦全集』21巻上、筑摩書房、1989年、485頁。
- 23 『日本メソジスト袋井教会週報』1935年7月28日、8月18日及び1937年3月28日。
- 24 『日本メソジスト袋井教会週報』1974年5月9日。
- 25 柳宗悦「書簡2085」、『柳宗悦全集』21巻中、筑摩書房、1989年、414-416頁。
- 26 外村吉之介「大原總一郎氏の思い出」、『山陽民藝』74号、1968年9月、2頁。
- 27 「岡山縣民藝協會規約」、『岡山縣民藝協會會報』創刊号、1947年6月、2頁。
- 28 杉岡泰「岡山縣民藝振興株式會社の現状」、『岡山縣民藝協會會報』4号、1948年1月、4頁。

- 29 外村吉之介「倉敷民藝館の周辺」、『民藝』455号、1990年11月、8頁。
- 30 「倉敷民芸館だより」、『山陽民藝』59号、1964年7月、3頁。
- 31 濱田琢司『民芸運動と地域文化：民陶産地の文化地理学』思文閣出版、2006年、143頁。これは、ディスカバー・ジャパン・キャンペーンや「アンノン族」と同様の指向性をもつ「ふるさと消費」として、資本の動きと連動した「故郷」の語りだと位置づけられる（成田龍一「都市空間と『故郷』」、成田龍一他『故郷の喪失と再生』青弓社、2000年、25頁）。
- 32 詳述しないが、静岡では高林兵衛、岡山では大原總一郎が関わったのに対し、熊本で外村は、敢えてその土地の金銭的な有力者を運動に取り込むことを選ばなかった。
- 33 渡辺満「二十五年前の民藝館回顧」、『熊本民藝』64〔65〕号、1990年1月、2頁。
- 34 「雑記」、『熊本民藝』17号、1972年7月、3頁。
- 35 外村、前掲「民藝の父を訪ねた頃」、『民藝』5巻5号、30頁。
- 36 金谷美和「文化の消費：日本民芸運動の展示をめぐって」、『人文學報』77号、京都大学人文科学研究所、1996年1月、83頁。
- 37 外村吉之介「後記」、『肥後の民藝』財団法人熊本国際民藝館、1975年、53頁。
- 38 熊本国際民芸館が、気候や風土の異なる地域から移築された蔵を利用していることについては、建築史家の川島智生も元の土地を離れると民家の意味を失う点を指摘し、外村が何を意図したのか疑問を呈している（川島智生「熊本国際民藝館の建築位相：移築された『蔵』と『民藝』の建築の意味」、『民藝』614号、2005年5月、26頁）。
- 39 外村吉之介『続・民芸遍歴』朝日新聞社、1974年、105頁。
- 40 岡山県民芸協会「民藝女性教室」、『山陽民藝』28号、1955年10月、1頁。
- 41 「岡山県民芸協会だより」、『山陽民藝』114号、1978年9月、4頁。
- 42 「家庭の中に用の美を」、『民藝』444号、1989年12月、64頁。
- 43 「母と子の世界民藝展」、『山陽民藝』151号、1988年3月、1頁。
- 44 外村吉之介『日本民芸青年夏期学校報告』（小冊子）1973年。以下、同書参照。
- 45 岡村吉右衛門「夏期学校に寄せて」、『民藝』311号、1978年11月、27-30頁。
- 46 外村吉之介「民藝の使徒」、『民芸廻向』富山県民芸協会、1988年、96頁。
- 47 金光章「昭和六十一年新年親睦会」、『山陽民藝』143号、1986年3月、2頁。